

愚直の果て（前編）

西村 壽 郎

私が旧制宇治山田中学に入学したのは昭和十六年であった。度会橋に家から自転車で辿りつく迄に三十分はかかる、それから学校迄は中島町から浦口高柳大世古、新道を通って養草寺の角に辿りつく迄に無数の街角を通過しなければならぬ。何しろ中学一年生にとってIIからVまでのギリシヤ文字の襟章こそは見落としてはならない軍国主義の魔物である。何故ならば市街の学生はみな徒歩通学となっているから何処の世古からこのギリシヤ文字の襟章の上級生が飛び出して来るかもわからないのであった。

これをうっかりと出会ったときに敬礼をするのを忘れていたと後日呼び出されて「お前生意気だ」と言はれてピンタをやられる、と言うのであった。

然しそれは自分自身が二年生になったときにわかったのであるが発育盛んな年令である、これは特別な者でない限り一年生は他の学年の上級生からはみんな可愛く思われていたのであった。

それでも家から学校迄の通学時間はどんなに一生懸命ペダルを漕いでも一時間はかかる。

皆田舎からの自転車通学には学習にも影響が出る程の成績に表われる。

我々一年生と二年生迄であったかいつも担任の先生が学期末に通信簿を渡して帰って行くとき廊下の壁に成績順を張って行くのである。

それに一学年二百名であって一クラス五十名であるが、トップは誰でラストは誰で二百番であると公表するのである。

何とむごいことをするもんだと思った。

それにしても田舎からの自転車組はみんな台付きであった。台とは百番のことであった。

私も一年生の学期末の成績は百二十番であった。それ

に教練の教官から「お前はいつも笑っている様な顔をしている、もっとしつかりしている顔にならなければいけない」と言はれた、この教官は戦前の兵隊からの志願兵で准尉で支那事変に出征して中尉になって帰って来たんだと言はれている人であった。

そうか俺は軍人には向いていないと言うことか、いつも笑っていると言はれたって怒っている様な顔をつくっているわけにはいかないではないか、それにいつも怒っているような顔をしているのはうちの親父だ。

それに時々怒る言動は不一致のことが多いこんなことを言っても仕方がない考えるだけ阿呆らしい話だ、と思つた。

よく軍国主義はいけないと戦後の言論の自由の象徴として言はれて来たことの分析にそれではどんなことが軍国主義なのかという質問に対する答えの一つがこれであつたのかわからない。

だからと言うわけではなかっただろうが二年生になつてすべてのことに馴れた、学校迄の通学路の半分である宮川の堤防の上の道はみんな砂利道であつた、それは自転車にとっては今でも難儀なものであるだろうその当時はこの道を行って来る自動車は乗合バスだけであつた、

その上道巾はせまくて今日の道路にすれば一方通行にしなければならぬ様な道である、いつもバスは同じ処を走るから砂利をハネ退けて通る、その為はこの轍の跡を走ると楽であることにも馴れて来た。

山の近くの崖下の道で宮川に大きく突出している長者淵という処は大きくカーブしているためにバスの轍跡が掘割のようになっていた難処であるが、家の注文で学校の帰りに買物をしてしていると、ここ迄辿りつくと夕方の秋の日はかなり暗くなつて来たこの難処に来てもうまく運転して通り抜けることが出来たのに我ながら感心するようになった。

それに度会橋に来てから川下に行く角屋君と永井君の二人の親友も出来た。

二人共に山中を卒業して社会人になっている兄のいる末弟であるからいろいろのことを教えてくれた。

これが中学二年生になったときの心境であつた。

とは言うものの一年生のとき十二月八日に日本がハワイの真珠湾攻撃をやって大戦果を上げて東京から来た戦意高揚のための弁士が全校生徒を講堂に集めて「神国日本断じて勝つ」と壇上でモーニングを着て踊つてから、「然らばそれは何故か」と言う。

真珠湾攻撃をやって日本はアメリカ太平洋艦隊を殲滅した。これを造り替えるには三年はかかるんだ、その間に日本は必ず勝つ。

八十歳を越した今の私の頭に残っている記憶である。然し半年も経たない我々が中学二年生になった昭和十七年の六月にはアメリカの秀れた戦略によってミッドウエーでは日本海軍の精鋭な航空母艦とかけがえのない航空パイロットを失った。

戦争に勝つか負けるかの問題は我々にとつては思考外のことであり持つて生れた自分の特性を磨いて人の上に出ることだ、何と言つても家で威張っている親父に頭を下げさせることをやらなければならない、と思つた。

それには我々田舎組の台付きというのを返上しなければいけないというのが「今日只今の一大事である。」（これは軍国主義の慣用語であるが）

そんな心境で勉強したためであつたかどうか二年生の一学期は三十九番にハネ上がった。

このとき全校生徒が講堂に集まつて学年別に代表が努力賞を貰いに行くことになった、これは一学年中に六十分以上成績が上った者ということになっているんだと言

三組が私で二組の山本完治君が二年生の代表で賞状を貰いに行つてくれた。同じ組の者は互にもうすっかりわかつているようになったが二組の山本完治君はそれ迄はあまり知らなかつたがそのとき初めてしつかりと同級生の同志として認識するようになった。

三年生になるとみんな放課後に剣道部とか柔道部とかバスケ部とかに入つて練習するようになった、この剣道と柔道は正課の中にあつてその上放課後もやれば五年生になれば二段位の腕前の人も出来る程であつたが我々自転車通学では秋から冬になれば毎日の練習では家に帰る迄に日が暮れてしまつて困るということである。

そのとき滑空班というのに入つたらどうかという勧誘に来た、これはグライダーを組立てて乗るんだと言ふ新しく出来た部であつた。

これは運動場一パイに使つてやるので他の部の邪魔をするといけないということで日曜日やるんだと言う。

これならやれるかも知れないと思つた。自転車通学の自転車置場というのは田舎の通学生集合所のようなもので時には会議所にもなる。

そこで大方の者がこの滑空班というのに入った。

何しろグライダーの初級というのをみんなを始めから習得するのであるから初めての合同練習のようなものである、学校収納庫に入れてある部品を出して来て胴体に主翼尾翼と組み立ててターンバックルで張ると結構な機体になった。

始めてからの二日間はこの組立て分解の練習であったがこれをゴム索で引つ張るようになるとやはり体力が問題になるのでこれの主任教官はちゃんとこれを計算に入れて身長と体力の大体同じ者を選んで勧誘に来たわけであつて田舎からの通学生ばかりであつた。

これは文部省からの指令で航空機搭乗員への志願熱を上げるためであつたらしい。

上級生は混じっていなくてみんな同級生であるから体力も同じ位であつた。

私だけが小学校の要養護の肝油組から出て来た身長ばかりが大きくなつただけで心配であつたがみんなの世間並の者と体力の差がないことに気づいてよかつたと思つた。

それに山中の四期先輩のMさんという人が海軍の予科練に行つて訓練中に機体の故障で不時着して右眼を失つたため除隊されて来て五年生に編入されて勉強している

人が居つた。

この人を頼んで来ていろいろ指導してもらふことになつた。

それ故軍隊のきびしい規律をまねたいじめやしごきは何もなかつた。

日曜毎に組立てや分解をやつてこれを習得すると、次は校門のそばにあつた天皇陛下の「御真影」の「奉安殿」の前に杭を打つてこれに二米位の綱をつけてこれで機体の尾部をとめる。

機首には頑丈な鉤にV字型に広げたゴム索をつける、これはマレー半島の生ゴムをもつて来たものだろうという話で強くて太いねばり強いもので外側は木綿の綱で被覆してあつて伸縮は自在であつた。

機長が一番で二番は尾翼の後に居て杭に縛つた綱を持つてV字型にのばした機体の進行方向に向つてうまくV字型に開いているかを確認する。

これを機長に助言して伝達すると機長が大声で右索三歩前とか左索二歩後とか号令をかける。

三番は主翼を支えて機体が走り出して前部の鉤を放れて飛び出す迄の主翼を水平に保つ役である。

四番より先は左右両側の索を引く番であり六人づつが

並んで十二人となり合計で十五番ということになりこの番号は始めにきめたままで変わることなく順番を繰って交替していくのであった。

次に飛ぶ機長となる者は操縦席に座ってMさんの指導を受ける、先ず肩掛け十文字のバンドを締めて足は前の足掛けに掛けてこれが左右に方向を変える尾翼を動かす綱線がついている。真ん中に立っているのが操縦桿である、これは、前に倒すと機首が下り手前に引つ張ると機首が上る、左右に傾けると主翼の水平を保つ調節をする、これはすべての動力のついた飛行機と同じであると言う。

それからは日曜毎に十五人が順繰りに地上滑走とか言つて操縦桿を下げて絶対に飛ばずに左右の水平を保つ感覚を養つて次にはようやく一米の高さに飛ぶ一米滑空というのを全員で修得した。

これは三年生の一学期と夏休みを費やしてからであった。

然し秋の運動会に大へんなハプニングが起つた。

何と言つてもこの滑空班というのは少年達の航空兵になる為の志願熱を上げるためのパフォーマンスをやらなければならぬ。

いつも北の方の空を眺めれば明野の陸軍飛行場の練習訓練の九七式戦闘機や隼戦闘機の訓練が気になる処であるがこれのおもちゃのようなグライダーであつても自分の身近な存在としてこれに乗って飛ばすということは大変有意義なことであった。

それで教官がMさんに乗つてみんなに見せてくれと頼んだらしい、運動会のいろいろの競技の予定を終つた午後の運動場でいつもの校門のそばでグライダーを組立て広い運動場を誰も居ないように立ち退かせてMさんが乗つた。

「おいみんな力を出してしっかり引つ張れよ」と教官の叱咤である。

我々は力の限り引つ張るのはわかつているが運動場の広さが大丈夫だろうか、と心配であった。

一、二、二、と足を前に出す度に号令をかけるのをいつもよりも大きな声を張り上げてゴム索を引つ張つた。

然しいつものように引つ張つても中々に放せという号令が来ないのである、もうしまいには足が上らずに前に進まなくなつて、ようやく放せの号令が来た。

するとグライダーは運動場の対角線上をスルスルと飛んでアット言う間に十米位の高さになった、ようやく一

米滑空の段階迄来たばかりの我々にとつては大へんな驚きであった。然し次の段階でこれは運動場をオーバーランするのではないかと思つた瞬間グツ、グツと二度程機首が下つた、精錬されたMさんの騙し舵であつた、それでも運動場で止まらずに片翼を柔道場の屋根に引っかけて止まつた。

みんなMさんの無事を念じて後を追つて走つた。

片方の翼はメチャメチャになつたが幸に操縦席は無事であつた。

みんな自分のことであるという思いにとらわれてMさんにしがみついた。

其後グライダーは修理不能で代りのグライダーを作る予算がなかつたのか、それきり滑空班は無くなつてしまつた。

年明けて昭和十九年早々に十五人の滑空班員はどうしようか、ということになつてこんどは射撃班をやるうと言ふことになつて五年生の先輩といっしょになつて教えてもらふことになつた。

それにしても我々十五人の旧滑空班員にとつては聞くに耐えない噂話がびこつていた「何しろMさんは不特着の名人だから」と言ふものであつた。

其後Mさんは我々に会う度にあのときもう少し早く「放せ」の号令を要請していたらよかつたのにといつて滑空班を無くしてしまつたのを自分の責任のように言うのであつた。

運動場ではせまくなつたので磯の河原の河川敷に頼もうかと思つとつたんやと言ふのであつた。

それ迄は三八銃は一挺づつ割当てられていて隊列を組んで整列行進の訓練のときは使つていたが射撃の訓練はなくこれは射撃班の特権であつた。

始めは標的の狙い方を教えてもらつた。

それから引き金を引く間合いと引き方をくどい位になる時間やつてから次は校門の外の傍に作つてある狭窄射撃場で実弾射撃をやることになつてこのことを父に話すと父は言つた。

「引き金は力で引くな手で引くな」

「暗夜に霜の降りる如く引け」

と言ふんだ、と言ふ。これは現役徴兵のときに聞いた話だと言ふ。

「それから昔から射撃ボンヤリと言つていつもきびきびと動作をする者は狙撃手には不向きである」、と言ふ

のであった。

何はともあれ一回三発づつ二回計六発ずつ撃ったそれで終りであった。中々に成績優秀であった。一回は二発しか弾痕がないといって探したが二弾がほとんど重なっていたのであった。

これで親父のいうボンヤリの仲間入りが出来るかも知れないと思った。

然し間もなく学徒動員令がやって来て校門を放れて工場に行ってしまったわけで三八銃を撃った軍国青年の最後であった。

我々山田中学四十七期生二百名は一クラス五十名で一組と四組の百名が四日市の海軍燃料廠に二組が四日市の日永の陸軍製絨廠に三組が桑名の山本重工業に行くことになった。

一年生から三年迄組替えはなく三組までやって来て級長は東山漸君であったのが四年生になって組替えて私は一組になった。そして級長は西尾君であった。それ故新しいつき合いが始まったわけである。

三年迄一緒にやって来た永井君はそのまま三組に残ったわけであるが角屋君は一緒に一組になって四日市の海燃に行った。

近鉄電車の塩浜駅に降りた処に第二海軍燃料廠があった。ちなみに言うと第一海軍燃料廠は横浜の川崎に、第三は山口県徳山に、第四は朝鮮の仁川に第五は台湾の高雄にあるんだと言った。

それにこの塩浜の第二が一番大きいらしい。

海の方に何料放れているのか海岸近くに石原産業の銅の精錬をやっているという東洋一だという三百五十米かの今迄見たことのなかった煙突が煙を吐いている。

これは海燃先の敷地にあるのだった。

ここが私にとって第二の故郷であった、それは人生にとっての大きな決断をしたからであった。

海軍少尉中尉大尉が指揮官でみな技術将校と言はれる少し違った肩章をつけている。

これに対して民間から来た工員は二等工員一等工員その上が職手その上に学識経験者として工長と言うのが居る。

第一日目は海軍少尉の案内で廠内を廻るのにすっかり一日を費やした。

この海軍技術将校はみんな高等工業の出身で海軍に志願して来た者ばかりであったので我々の立場と中学からの生ひ立ちを理解してくれていたのだろうか意外に親切

であった。

見学を終つてみると、設備だけは大了たものであるが休止状態の処が多い、そつと工具に聞いてみると、もう今年になつてから南方からの原油が入つて来ないんだと言ふ。

それでも四組の五十名はそつくりドラム缶の製造工場に回された。

後の我々一組は四班に分けて十五人の一班が対爆剤と言ふのに回された。これは角屋君が班長で四エチル鉛の製造工場の手伝いである。

四エチル鉛は対爆剤といつてガソリンエンジンのノックキング（異状爆発）を防止するものであつて非常に重要なものだと言ふ。

廠内の海に面した岸壁には九州から持つて来た石炭が山のように積んであつて五階建てのビルのようなガス工場でこの石炭を燃やして水蒸氣を吹き込みこれを強風で吹き出して水性ガスと言ふのを造つてこれは水の中の水素を分離して他に炭酸ガスと一酸化炭素の混合ガスであるがこれを分離工場に送つて水素を取り出す、この水素をオクタン価の低いガソリンに高温高压で添加すると高級ガソリンになると言ふものである。

それに民間から甘藷を発酵して造つたアルコールの98%のものを持つて来てガソリンに混合して増量する。

これ等の粗悪ガソリンを四エチル鉛を〇・二%入れるとオクタン価が上つて航空ガソリンになると言ふものであつた。

然しこの四エチル鉛が猛毒であつて知らず知らずのうちに皮膚から浸透して神経をやられて発狂すると言はれていた。

これは戦後もそのまま長い間使われていて南極の水の中に迄鉛があると言はれて禁止になつた。

角屋君の一班は運転にはかかわつて居らず工場周りの雑役であつたけれどもこの鉛中毒を防止するために毎日みんな牛乳を飲ませてもらうんだと言つた。

しばらくすると四組のドラム缶工場はそのままで一組の対爆剤班と触媒の方に行つていた班とを呼び戻して一組全員で過酸化水素を作ることになつた。

過酸化水素というのは H_2O_2 という化学記号で H_2O は水であるからこの水にO即ち酸素一原子をくつつけたものであつた。

これはドイツから教えてもらった技術で戦前既にドイツではこの過酸化水素水によるロケットエンジンを完成

していたと言う。

硫酸と硫酸アンモニウムの混合液を電気分解すると陽極に生じる過硫酸アンモニウム液を減圧蒸留すると過酸化水素の三十五%の水溶液が出来る。

これが住友化学で製造した呂号液を作る原液であった。

学生だけの工場でこの三十五%の過酸化水素水を更に減圧蒸留して八十二%の過酸化水素にするこれが呂号液と名づけた秘密兵器ロケットの燃料であった。

イ号液というのはどんなものかわからなかったが徳山の三燃で作っているらしいがこの二つの燃料を合わせるロケット噴射を起すというものであった。

何しろ石油の原油は南方から来なくなった海軍の燃料として国産の石炭はいくらでもある、これで電気を作り水を電解して出来る燃料だから最後の国運をかけた事業であったわけであった。

何しろ八木科学技術院総裁が「必死必中の兵器ではなく必生必中の兵器でなければならぬ」とラジオで放送したのはこのときであった。これは呂号液のことだろうと思つた。

然しこれはもう手遅れであった。

もう少し一年か二年前にこのロケット兵器が完成して居れば日本を空襲に来たアメリカのB 29もほとんど帰ることが出来なかつただろうと思う。

何しろ戦後の冷戦時代米ソの軍拡競争でドイツの化学者を連行して行つたソ連がこの過酸化水素で大陸間弾道弾を飛ばしたという報道があつたから間違いない技術であつたんだらうと思う。

先ず岸壁にあるガス工場から熱分解という原油の精製装置迄のびているガスパンを外して来て、これは直径四十糎もあるのをガスバーナーでその場で縦に切断した、この大きな金の樋を八人位でロープをかけて肩にかついで新設の工場迄運んだ。

工場の長さは五十米もあるからこれに二例の装置を作つた。この半割のガスパンを樋受けのように二段階に上と下に取付けて水を張つた。

実験室で使う最大のフラスコを水に半分程浸かるように木わくに固定した。

このフラスコにはコルクの栓がしてあり二本のガラス管が通っている一本は原液と出来上つた H_2O_2 を出し入れする為に下の方迄のびる。もう一本はフラスコ内の減圧をする為に上の方で切れていて H_2O_2 の35%が沸騰して蒸

気が出てくるパイプであつてこのガラス管は下の段に並べられたフラスコに導いて栓の穴からフラスコ内に放出されて上から冷水をかけて冷ますとガスが水になつてたまつてくる。

これは一就業中に二回程取出せばよいのであるが H_2O_2 が3%残っているから市販の薬局に売っている傷の消毒剤のオキシドールと同じものであると言ふ。

先ず上の段の湯舟樋に水を張つて上から配管してある蒸気管を開けて水の中にバリバリと音を立てて加熱する、これは蒸気と水とが自由に出せるから温度が八十度以上にならないように調節をしなければいけない、何故ならばフラスコ内の H_2O_2 が減圧によつて八十度を限度に蒸留させなければ爆発するんだと言ふ。そして爆発防止の安定剤を原液に入れるこの安定剤こそ極秘の物質でありドイツから教えてもらったものであるという。

ズラリと並んだこの実験室工場も一人当り十個のフラスコを受持つことになつて操業を開始した。

何といつてもこの原液の注入と出来上つた沸騰のあわを見て八十%になつたと予測することである、それに出入れの際のときのコツである、出すときも入れるときもこのガラス管を利用して減圧の吸引力を利用するのである

があまりフラスコの底に近づけ過ぎるとすぐに割れてしまふのである。

(六十年後)

先日の数少ない山中の同窓会でこの時の話が話題になつたが級長の西尾君は陸士に合格して十一月に行つたのでこの H_2O_2 の実験室工場のことは知らないと言ふことであつた。

もう故人になつてしまつたが二見の木村君が選出されて、このとき真空ポンプ室の管理室でつきつきりであつたと思う。

昼夜に分けての二交代制で一ヶ月程運転して実験室用の白衣をもらつて着ていたが H_2O_2 の八十%のとぼちりではぼろぼろになつてしまつた。

この間にどの位の生産が上つたのかわからないがこれはみんな広島島の呉に送るんだと言つて今迄触媒部に居つた女工がやつて来て工場の外でドラム缶でロウソクの蠟を溶かしてこの中に一斗ビンの保護用の籠を浸して蠟付けをしていた。

これは輸送中 H_2O_2 がこぼれて発火するのを防ぐためらしい。

これは何もかも試験研究の段階であつて初めてのことに

であったがようやく一ヶ月程運転して馴れて来たとき十二月七日に東海大地震がやって来た。

フラスコ工場の揺れる中をみんな外に飛び出すとはるか向こうの海近くに聳えている石原産業の大煙突が真ん中から折れて落下するのを見た。

海軍技術中尉の「伏せよ」という号令でみんなその場の地面に伏せた。

すると胸の下から水がドッと湧き出して来た。これは下に通っていた工場に引込む水道管が折れたためであった。

このフラスコ工場を復旧する作業に手間をかけているとき夜になると伊勢湾の対岸にある知多半島の上をB29が空襲にやって来るようになった。

もう日曜日なしの突貫工事であった。

或日曜日背の高い者がトラックの荷台に乗れということとで十人位立って互に腕を組んで落ちないように要心して四日市の山の手の方に行った。

ここは全くの山の谷田のある処で人家は一軒も見当らない、狭い山田の谷を登って行くと三十米位の間隔で農家の土蔵のような建物が八棟程建っていた。

これが本格的な呂号液の工場であった。

外装はトタン張りでも建物は鉄骨であったが床がコンクリートされているだけでまだ何もなかった。

この呂号液と言うものは鉄のパイプではすべての配管が駄目ということと特に鉄以外のニッケルとスズの合金であると言われるピカピカのパイプをのばすのである、鉄とは違ってやわらかいものだ。これを二人一組になって指示通り巻き物をころがして伸した。

この金ピカのパイプはどの位の価格のものだろうかと思うと全く国力のあらゆる先端技術をかけた工事だなあと思った。

そうこうするうちにフラスコ工場の方はどうか復旧して元の通りにやることになったが年の暮が近づいていよいよ我々は来年早々に切上げ卒業ということになり四年で旧制中学卒業ということになった。

級長の西尾君はもういち早く陸士に合格して十一月早々行ってしまうて居なかった。

角屋君は海兵に願書を出したらしい。

私は予科練の先輩のMさんの指導を受けた滑空班のことが忘れられず一昨年から新設された浜松工業専門学校の航空機科というのに願書を出した。(これは旧制高等工業の改称である)

同じ浜松工専に受験するS君、化学科のY君それに電気通信科（テレビ）のN君との四人で一月早々に受験に出發した。

浜松は工業都市であつて半分程が空襲で焼けてしまつて、どうにか残っている旅館に駆け込み宿を頼んだが、「うちは特攻隊の兵隊さんが泊つて居られるので部屋がありません」

と言う。これは何と言つても四人のうちで唯一人航空機科と言うことで衝撃を受けた。

学校の近くには陸軍の爆撃機隊の飛行場があると言うことであつた。

ようやく街外れに近い処に宿を見つけて二晩泊り二日間の受験をすませて帰ると家の方から手紙が来ていた。

この浜松工専の航空機科は志願者が多くてむずかしいと言うことを聞いて後から滑り止めということと神戸の高等商船学校の分校の願書を出してあつたのが大阪分校に受験に來いと言う通知であつた。

これが浜松工専の合格通知の來る二日前であつたので又この受験に行った。

近鉄参宮線で大阪の環状線の鶴橋駅で降りて南海電車に乗り換えた。

目的は大阪府泉南郡佐野町にあつた大阪分校であつた。

もう和歌山県に近い現在では関西空港のある処であつた。

前日に出かけて行つて玉ねぎ畑の中の一軒の宿を頼んで学校を見に行つて確かめた。

新しい学校で中々に設備のそろつている学校で明日受験して帰路についた。

浜松工業専門学校からの合格通知が間もなく四日市の海燃の寄宿舎にやつて來た。

「おつ西村やつたじゃないか」とみんな驚いた祝福の言葉であつたが私自身は浮かぬ顔であつた。

浜松受験のとき駅前旅館で特攻隊の兵隊さんが泊つて居られるので部屋がないと言はれたことが其後何かにつけて私の心を占領することになった。

其後半月程経つて又高等商船の分校の方からも合格通知がやつて來た。

何と言つても第一志望は浜松工専の航空機科であつた、それが特攻隊のことが身近に迫つていることを思い知らされたのであり、高等商船学校はどうしたことか浜

松工専よりも格段に試験問題はむずかしかった、特に数学の問題は山を当てたという処であったのだ。

これは大変なことになったと思った。

角屋君は海兵に合格して行ってしまった後である、もう一番に相談して忠告を受けるものは居ないと思った。

三月中旬に卒業式をやることで家に帰って久し振りに学校に集まった。

これは三年間同じクラスで個人的な性格や家庭事情やつき合いが出来ていたのを打ち壊して新しく組替えしたものの同志の旧交を温めて前の思い出新しい工場のこと等語り合った。

何といつても山中四十七年間の伝統を壊して四年生と五年生が同時の卒業式であった。

この様な時代の断層を経験した者はなかったであろうと思うとどうしても我々の心の中をしつかりと後世迄伝えることが義務であるという気持ちになって来て七十年後の今日うすれて行く記憶の残り火をかき起して筆をとっているつもりである。戦後は又復旧して五年制になって五十一期迄行って新制高校になった。

四年生になってからの組替えで三組にそのまま止まって桑名の山本重工業に行っていた永井君が言うには、最

初に工場に行ったときの社長の訓示が日本は必ず戦争に負けるみんなこう覚悟して頑張つてほしい、と言ったそうである。「そんならもうみんな帰ろうか」と言つた者があつたと言う。

これは必勝の信念というものを分析すると何によつてこれが起つてくるのかと言うことに対する反論のもとになることだという考えに至ると或はこう考えてみるのも必要ではないか、と思つた。

そうすると私は戦争には勝つんだと思つて必勝の信念と迄は行かない迄も滑空班の心持よさからの浜松工専の航空機科志願であつたと思つた。

そして滑り止めとは言うものの商船の船乗りとは戦争に勝つても負けても無くなることはないだろうと言うのが心の底にあつた。

それに何と言つても海軍予備練習生と言う資格をもらつて学費はいらない。

そのまゝ海軍に入隊すれば兵曹長になれる。家に帰つたら祖父は脳溢血で寝ていた。

国民学校高等科二年生の弟が農繁期の手伝いになるだけであるがどうにかなるだろう。という父の判断で高等商船の分校に行くと決定した、然しこれは受験に行つた

大阪分校ではなくて岡山分校の機関科に行けという通達であった。

家にあった鉄道地図を見て何と言っても山陽本線に乗るには京都に行かなければいけないと言うことで父が京都迄送ってやると言う。

それはいいけれども帰りは大丈夫だろうかと言うと京都の旅館に泊ればよい、と言う。いつもと違った子に対する熱意だと思った。

こうして京都駅の山陽線乗場で見送ってくれたのが夜の九時頃であったから心配であったが私が岡山県児島半島の味野町の高等商船学校の入学式をすませて落着いてから三日目に父から手紙が来た。

あの晩は駅員に頼み込んで近くの宿を世話してもらった、と言う、京都は空襲がなくて宿はいくらでもあったらしい。

それでも同室で若い船員が二人居ってお前を送って来たいきさつと高等商船学校の入学式に出発したんだと言うとそれはよい、我々とは違うんだと言って普通船員であることを卑下したような言い方であったと言う。

それでも学校は大へん厳しい教育らしいから頑張れ。

と書いてあった。それでも持つて来た弁当のおにぎりがたくさん残っていたので私は明日は伊勢に帰るんだからあんた達よかつたら食べて下さいと言うと、それは有難い私等九州に行くのに明朝出発するので食糧の当てが無くなったんです、と言ってこれは有難いと言って食べたと言う。

これでやっと一安心という処であったが学校の方は何しろ同級生ばかりで上級生は居なかった航海科百五十名機関科百五十名合計三百名の大世帯であった。

海軍式の日課があつて寄宿舎で朝は総員起しのラッパを合図に飛び起きて庭に整列国旗の掲揚はラッパの吹奏に合わせて行い、そのあと海軍体操である。私は四日市の海燃で技術将校から暇があればやらされて来たので何でもなかったが初めての学友は少しとまどっている様子であった。

これは各分隊から（航海科三分隊機関科三分隊）各一名づつ選抜されて計六名月曜から土曜迄一人づつが交替でこの指揮をとり週番室に当直することになった。

このとき教官の控室に來いと言う伝達が来たので行ってみると、お前山中の福田と言う同級生を知っているかという副校長の質問であった。何と副校長が福田君の父

君で其後大変御世話になった。午前中三時間午後は四時間の強行軍であった。

一日が終ると寝室に戻り消燈ラッパを合図に眠りについた。

何しろ寄宿舎から学校迄は三K位の距離があり毎日大変な運動であった。

その上学習によりやく馴れて来た頃短艇漕ぎの練習が始まった。

午後の二時間を区切って一クラス五十名が二トンと言はれたボートに乗って海軍兵曹の指揮のもとに交替で練習した。

片舷六名の座席があつて両舷で十二名づつ漕ぐのであつた。

先ず最初に艇内に縦に寝かせてある櫂を「櫂立て」の号令で両腕で支えて真直に立てる。

次に「櫂降ろせ」の号令で外側の水の上に櫂先を降ろして漕ぎ台という溝に嵌める、これで用意終りである、次に一の号令で両腕につかんだ櫂元を前につき出して櫂先は空中を後ろの方に下げ次に二の号令で櫂先を水につけて力一パイ水を前の方に押しやるわけで舟は座席の後ろの方に進むので漕手はいつも後ろ向きに座らなければ

ならない。

これが何千年も前からやって来た人類の舟の動かし方であつた。

櫂立て、櫂降ろせ、一―二、一―二、ただそれだけの号令の中に櫂をひねって水をうまく押しやる技術が含まれている、これが最大の訓練であつた。

それにもう一つ秘密の号令がある、これは「櫂流せ」という号令であつた、櫂を舟の進行方向にそわせるために流してしまふんだと言う完全に流して放つてしまふわけではない。

誤つて櫂の漕ぎ手の処迄海水につけてしまうと後で滑つてしまつて漕げなくなる。

寄宿舎から学校迄の三Kの通学路は味野川という小さな川の堤防の上の道であつた。

この川の反対側は何十町歩という塩田であつた。味野の町ははるか向こうにいつも霞んで見えている。

或日の訓練のとき、もうみんな大分に馴れて来て何処かに漕ぎ出したいと思つていたときであつた。

教官が今日は面白い処に連れて行こうと言つた。

この味野の町は縫製と塩田の町であつた。

街を歩くと陸軍のゲートルが軒下に積んであり何処の

家からも家庭動力ミシンの音がタダ……と聞こえて来た。これは女の仕事だろうか、男の方は塩田の仕事だろうかと思つた。この塩田は海水を取入れる為に周囲に大きな溝がめぐらせてありこの溝を維持する為に又大きな堤防がありこれには松並木が植えられていてみな大木であつた、これはこの塩田の歴史を物語るものであつた。

この水路になんと短艇を乗り入れたのである、潮の満干にも耐える程の深さと堤防の高さがあるが舟の両側に櫂を降ろして漕ぐとあまり余裕はないけれども、は川のように海水が流れていた、然し向こうに橋があるそこはせまいのである、どうやってこれをくぐり抜けるのか、と思つ間もなく橋のすぐ近くで「權流せ」の教官の号令であつた。

すると漕ぐのをやめた櫂を一齐に舟側につけたまま橋の下をスルスルとくぐり抜けた。

そんなに巾のある橋でないからうまくくぐり抜けた、みんなヤッターという気持ちであつたしばらく余力で橋を放れると權立て、權降ろせから始まる普通の漕ぎに戻つた。

こうして塩田を回る迄に四ツの橋をくぐり抜けたのである。

これは訓練の実績を自認させるための教官の考えた試験であつた。

それに入學式がすんでからの二ヶ月間六月の始め迄瀬戸内海の戦争を忘れた学校生活を満喫した、他の学徒動員の同級生が卒業式すんでから工場に残つて空襲に遭遇した話を終戦後聞くと全くこれは幸運であつたわけであるが、何と言つても海軍の根拠地呉軍港が近くにあつたのになあといい思ひに戦後いろいろ調べて見ると、四国の松山航空隊と言つのが紫電改と言つ日本海軍最後の新鋭機でアメリカの艦載機を寄せつけなかつたからではないかと思つた。

この航空隊はハワイの真珠湾攻撃の航空隊司令であつた源田実大佐が南の島に生き残っている熟練パイロット達を呼び集めて作つたスピードの出る紫電改があつたからだというのが結果論であつた。

何と言つてもこの強行軍の学習の日課について行かねばならないと言つのが我々の毎日の思ひでありその時間を与えられた幸運であると思つた。それに航海科は機関概論、機関科は航海概論と言つたのをやらなければならぬ。機関科は船のエンジンの構造や故障の防止法を図解や模型によつて修得する。

陸上機関と大略に言つて何処が違ふかと言ふことである。それは大型であり概して低速回転させるものが多い。船のスクリューは低速回転させなければならぬのだと言ふ、六十から百二十RPMだと言ふ。即ち一分間回転数が六十から百二十迄だと言ふ。

あまり速く回転させるとスクリューのそばが水中に真空状態になつて船を後に引つ張るんだ、と言つた。

それに何と言つても今迄に長い間汽車と汽船と言はれて来て動力のついた陸上海上の乗物の名称の通りボイラーで蒸気を発生させてこれで動力を得て動かす蒸気機関の構造である。

給入圧縮爆發排気と言ふのは誰にもわかる普通のガソリンエンジンの動く行程でこれを四行程機関と言ふ、然しよく考えてみると爆發の一行程だけが動力源になつていて後の吸入も圧縮も排気も動力源の力をマイナスにする行程であるわけでその点この蒸気機関はスライドバルブ(滑弁)で動き、しかもピストンの前後に動力を加える。

原動機の馬力計算はシリンダーの中をピストンが動く容積に回転数を掛けたものとしていてこれを馬力定数で割つたものと言ふことになつてゐるがこの蒸気機関はこ

の馬力計算の倍の力が出ると言はれた。

それにガソリンエンジンのように潤滑油を入れる必要はないこれは用を終えた蒸気が水になつてその役目を果たす。

これが為に機関の耐久力があつて故障が少なかったと言ふことで長い間愛用されて来た。戦後も大へん長い間使われて来たが何分ボイラーの蒸気発生と構造的にエネルギー効率が悪いと言ふことで今日完全に姿を消した。

今では内燃のガスタービンでは五十%の熱効率があると言はれているのにこの旧式スライドバルブによる往復動機関と言ふものは十九%の熱効率しかなかつたんだと言ふ。

それ故現代では大てい的大型船では重油を使った内燃機関のジーゼルエンジンと言ふことになつた。

そのときの教官の言である何しろボイラーで蒸気を発生させこれでスライドバルブの蒸気エンジンを動かすという二度手間かけることは将来なくなるだろう。

石炭を積んでボイラーを運転して太平洋を渡ろうとすると一万トン級の貨物船ではこの燃料の石炭の積込みにクレーンで積込んで四日間かかるんだ、これをジーゼルにしてみる重油タンクに重油を入れるパイプを接続して

寝とればいいんだ、と言う。

この教官戦前は南米航路の移民船アルゼンチナ丸の機関長をやっていた、と言うことであり一瞬戦争中であるということをお忘れさせる講義であった。

話の続きになるのであるが動力機関の分類を解説すると、エンジンは大別して二種類に分けられると言う。

内燃機関、と外燃機関、ということになる内燃機関と言うのはエンジンの内部で燃料を燃焼（爆発）させるもの、ガソリンエンジンやディーゼルエンジン等であり外燃機関とは外で燃料を燃焼させて、主に蒸気を発生させてこれをエンジン内部に導いて動力を得るものこれはスライドバルブによる往復動エンジンと他にもう一つ蒸気タービン・エンジンがある。

この蒸気タービンエンジンは人類が手に入れた最初のエンジンである、と言う。

古代エジプトの四千年前の宮殿で祭りのときに重い大理石の扉を開けるのに蒸気を噴射して使う設計図が出て来たと言う。

これは戦争になる前の話であるがイギリスの客船（五万トンあったか）クインエリザベス号はボイラーの蒸気タービンで発電機を回し電動モーターでスクリュー

を回しているんだと言う。戦時中の今何処に在るだろうか。

とに角このロータリーという回転式のエンジンは内燃、外燃を問はず往復動の死点というのを持っていないのでそれによって水の上に浮いている船舶には格段に心地がよいんだという。

死点というのは往復動エンジンのピストンが一回転に二回は必ず止まることを言う。

それから船舶という特別な建造物の持っている陸上を走る電車自動車にはない動力の構造がある。

陸上の交通手段の鉄道機関、路上を走る自動車共に地に足がついているわけである。

鉄道は鉄車輪自動車はゴム輪であるが船は水の上に浮いているのである。

空に飛べない水鳥が水に浮いて移動しているようなものである。

それでブレーキのきかない自動車が何もない広場を走っているようなものだ、それでもハンドル操作で大体目的の場所につくことが出来る。然し考えてみると船のハンドルと言うのは「取舵一ぱい」「よう候」「おも舵一ぱい」「よう候」の号令の如く「よう候」は「よかるう

それ位で」の略ではないかと思う。これは機関科の生徒が航海概説という時間に受けた航海科の教官から受けた教育の自分なりの解説である。

それ故船が港に入るときは特別な技能を持っている水先案内人というのに任せるわけである。それだからエンジンを止めるわけにはゆかずブレイキもなく推進力のスクリューを止めなければいけない。それ故シャフトのクラッチを切ってこれにブレイキをかける。

ざっとこの様なわけであるから全力を上げて大洋を航行するときはスクリューが海の水を後に蹴ってその反動で船を動かすわけであってシャフト一本に力がかかるわけでこれを船体を受け止める装置が必要となる。

これがスラストベアリングと言うものである、推力軸受と言ってスクリューの推進力を船体を受け止めるものだと言う。

これが完全でないとエンジンのクランクを突き曲げたり、ロータリーエンジンの減速装置を駄目にしてしまうと言う。

短艇訓練は塩田回りで一応区切りがつけたいけれども瀬戸内海は何と言っても内海であると思つていたが或時沖合にある壱場島の方に向つて生徒だけで漕ぎ出した。

この時教官の都合は悪くて乗つていなかった、始めのうちは波もなく調子よく漕いでいた。すると急に湾の奥の児島港の方から久須美鼻に向つて行く海流が強くなつて来た。

どれだけ力を入れて漕いでも壱場島から離れて行くようである。自分の意志を以て進行方向に力を入れているのにこれは全員一致した意志の行使であるにもかかわらずその反対の方向に向つて船ごと流されて行くこの不安、何とも言えない気持である、これはいけないと思つた、舵を握つていた班長が左に舵を切つて取舵一ぱいと言つた、すると船が左に向つて走り出した、これは又速いものである。学校の方に向つて元の出発点の方に向つて走ると潮流から脱することが出来て助かつたと思つた。私は宮川の岸辺で育つていつも川の流れは同じ方向に向つて流れている、そしてその強さは見ているだけで大略わかる。

然しこの内海といわれている瀬戸内海の海でもその海流の速さそして何処で何時起るかわからない無気味さ、これは源平合戦の壇の浦で源氏が勝つた潮流と言はれるものの正体に出合つた経験であつた。

戦争中らしからぬ学校生活も六月始め頃一変した、或

夜北の空が赤く焼けているのを見た。翌日わかったことは岡山が空襲で焼けたんだと言う、一週間もすると神戸の分校の同期生が空襲で学校が焼けてしまったのでここ岡山と大阪の佐野と東京に分かれてやって来ることになった、と言う。学校には机と椅子を町の小学校から借りて来て並べ直した。

寄宿舎の方は一室十人づつであったものを三人づつ増員して寢床を作り直した。

私の班には福岡県出身の三人が入って来た。神戸の方には私の中学出身の山本完治君と吉村君と言うのが居った筈であるがどうしただろうか、と聞くと二人共無事で東京に行ったと言うことであつた。

空襲の被害や他の同級生のことを聞いても何も言はなかつた。

自習の机は別の処にあるので夜になってから寢床の中で学習のことをよく聞いた。

これは大分前から空襲警報の度に防空壕に入りに行って学習の時間が少くなつた為だろうか。

「ボイラーの故障でプライミングとこのはどのうことか」、と或晩聞いてきた。

「それはボイラーの高温高圧で蒸発する時に起る現象

である。」と私は言った。

「それはわかっているがどうして起つてどんな不具合を起すのか」、と言う。

「それはボイラーウオーターのデンシテイが上つてくると危ないということだ。」と言つた。

「デンシテイと言うのはボイラーを運転中に二時間おきにスカムパンというもので手に高圧の缶水（ボイラーの水）が飛ばないように抜いて来てその比重を測つて見ることか。」と言つた。

なんと空襲の下で勉強して来たと言うのによく頭に入れているなあ、と思つた。

「そうだ、それに缶水（ボイラーの水）の量が極限迄少なくなつたときこの比重が上つていて急にあわてて給水するとこのプライミング現象が起るらしい、水面が泡立つて来て蒸気の中に水滴が混ざつて飛び出して来て蒸気タービンの羽根をメチャクチャに曲げてしまふらしい。」

「これは鉄砲玉のようなものだと言ふんだ。」

「それは一番重大な故障だなあ」、と言つた。七月になると水泳の訓練が始まつた。

運動場にみんな整列して海軍中尉の配属武官が、「こ

の中に金槌は居らんか」居ったら列外に出よ」と叫んだ、するとなんと三分の一位の者が列外に出た。

お前達は別口だと言つて整列して番号をかけて人数を確認した。

これは練習中に溺れてしまった場合の人数の確認のためであるだろうと思つた。

「残りの者はみんな泳げるなあ」と叫んだ。

「ハイ」と何か優越感のある返事である。

するとみんな一列に並んであのガラ鼻の先に行けと言ふ、ガラ鼻と言ふのは運動場から海につき出た石積み防波堤のことであつた。これは巾は五米程の堤防であるが何処から持つて来たのか工場の石炭を燃やした灰で中がつめてあるのでこんな名前をつけたんだろうと思つた。五十米程の長さがあつた。

干潮のときは堤防の下も膝迄位の水であり歩ける位であるが今は満潮で立てば胸迄海水に浸る位である。

教官が「一人づつ泳いで運動場の方に泳いで行くんだ、そして五米位間隔をあげよ」と言ふ。

みんな水泳に自信があるのかスイスイと平泳ぎをやつて行く。

すると教官が先頭から順番にお前はAだとかBだとか

等級を呼んだ、ガラ鼻堤防の上から見ると足の蹴り方がよくわかる、何と言つても船が沈んでしまったとき如何にして体力を消耗せずに長時間泳げるかの訓練であつた。

Aクラスは何も言うことのない泳ぎであるがBの方は難点があると言ふ。

全員がすんでから教官の解説であつた。

「足で水を蹴るときに足の甲で水を蹴るのはいけない、足の裏で蹴らなければいけない」と言ふ。「このB組のものはみんな足の甲で水を蹴っている者である」と言つた。

これは無意識で泳いでいてもこういうくせがついていては必ず^{こぼ}腓返りを起すんだと言ふ。

私は中学のとき夏休みには学校の課外授業で二見ヶ浦の海水浴場に泳ぎに行つて最後に夫婦岩を回つて泳いで来る五籽の試験に合格して居たのでAクラスに決定したのであるが後日大変なことが起きた。

金槌組は運動場の先に杭を打つてある処に集まつてこの杭につかまつて足の蹴り方の練習から始まつて毎日やっているなあと思つた。

B組のものは泳げるのであるから間もなくくせを治し

て教官の許可が出て我々A組に合流して来て大勢の集団で自由遊泳ということになった。

実に楽しい毎日であったが或日風があつて外海は波が高いとゆうことで運動場の南側にある味野川の流れ来て海に合流する処に堤防で囲つたような内海の中で泳げという教官の指示であつた、しばらく泳いでいると何かおかしい泳げないような気持ちになつて来た。

隣を見てもみんな先に進まずに立ち泳ぎのような泳ぎ方である、すると教官が運動場の岸壁の上から大声で叫んでいる、手まねきして早く返つて来いという合図である。

然しどうしても泳いで進むことが出来ないのである。立ち泳ぎでようやく呼吸することが出来る状態になつた。

それでもみんな死にもの狂いの泳ぎでようやく岸壁の方に泳ぎついた。教官が心配顔で遠くを見やつて溺れている者はないかと眼を光らせていた。

後でこの原因は何だつたのかと聞いても誰も回答はなかった。

これは私の人生の難問として残っていたが戦後四十年してようやくこの謎がとけた。

テレビの普及のお蔭で世界中の珍しい自然現象をやつている。

ブラジルのアマゾン川の川と海との合流のアポロッカと名づけた海水の大きな逆流の有様をやつていた。

こんな大河の河口では泳ぐことはないであろうが味野川という小さな川の流れに出る処である。その時の気象状態は海からの風が強かつた。

泳ぎ始めのときよりも潮が満ちて来たのは確かであつた、そうすると味野川の水も前日の降雨で増水していた、それでも干潮で川の水は勢いよく海に出ていたのが満潮によつて比重の重い潮水が川の流れの下にもぐりながら逆上して来たのである、その時の水面を泳いでいた我々の顔を直撃したわけであると思つた。近年になつて自衛隊の特殊部隊、これは災害救助隊の訓練の模様をテレビで見た。

普通の海面を泳いでいる隊員の顔を目がけて教官が水をかけるのである、シュノーケルをくわえているがかなりの訓練のようである。

これは海の荒れて漂流している人を救助する状況を作り出しているのであつた。

戦後三重県で津の県庁近くの橋北中学の女生徒が安濃

川と志登茂川の海に合流する処で水泳練習をやって二十人も水難したと言う。

何と言つても川が海に流れ込む近くで泳いではいけないというのは天の戒めである。

七月中旬を過ぎる頃から静かであったこの瀬戸内海も時々空襲警報が鳴ってアメリカの艦載機が通り過ぎるようになって日曜日には隣にある日の丸造船所の要請で鷺羽山の先の久須美鼻の下の備讃瀬戸という急流を越えて香川県の県境にある釜島という処に行った。

日の丸造船所は陸軍の上陸用舟艇を造っていたのでこの格納庫を作る手伝いだと言うことで我々一分隊五十名が前の二つに分かれて陸軍の上陸用舟艇に乗って久須美鼻の下の急流を渡った。

これは今迄に経験したことのない海流の強さであった、敵前上陸する為の舟艇であるから馬力は強いが、激流の上に向かって舟が流されるのを防ぐ為強行突破して行くのにはびっくりした。

釜島と言うのは周囲五軒位の丸い島である。これは名の通り真ん中がくぼんで畑であった。それに周囲の海岸線は全部盛り上がっていて少し小高い崖になっている。

これに舟が隠れるだけの防空壕を作るわけであるが既

にもう堀割りには出来ていた。これの上に松の木を伐つて来て並べて土を覆うわけであるがこの松の木は海岸線に松林があつて既に切つてあつてみんなで肩に担いで運ぶだけであつたが壕の数は十二もあるから中々のものであつた。

後もう一日次の日曜日にも行つたが工事の進んだ形跡はなく我々だけの木運びを待っている様子であつた。

戦後岡山県地図を買つて見たがこの釜島という島は書いてなかつた、然し中国が尖閣に進攻して来てから日本中の小島もしっかり確認して無名の島も命名する運動が起つて来てから日本地図を買つて来た。

なんと釜島というのは瀬戸内海の真ん中に香川県の県境にしっかりと書いてあり釜島と銘がある、全く風呂釜を思わせる地勢だなあとその時思つたものである。

然しここで私の頭の中に残っていた疑念が再発した。

あれは上陸用舟艇を入れるには小さかつた壕ではないのかと思つたことである。

終戦間際の原子爆弾が落ちる前迄は本土決戦がまじめに考えられていたと思うと日本という狭い国土でゲリラ戦をやるのは瀬戸内海の内海戦位ではないかと思つたことがあつた、これは大小幾多の島陰から飛び出して来て

アメリカの艦船に特攻攻撃をかける。

神戸から来ていた学友の一人が水上特攻という小型ボートの先に爆弾をつけて物凄い速さで走るんだと言った。

これはもう神戸で試運転に走っている、と言った。今テレビで競艇の様子を見るといつも頭の片隅にこのことが浮かんで来る。

この急流は備讃瀬戸という名がついていて瀬戸内海の内海運ではどうしても通らなければならない水路であるらしい。その時でも毎日一回は海軍の水路部の舟であると言ふ小型の高速艇が何か合図をしながら通行した。

この釜島の海岸線の壕に隠れて水上特攻艇が久須見鼻の急流にやって来た敵艦に体当たり攻撃をやる。それは一番有利な地勢であったんではないかと今になって考察するのである。

それを実証するような出来事が起った。

しばらくすると我々寄宿舎のすぐ隣にある日の丸造船所目がけてアメリカの艦載機がやって来て急降下の機銃掃射を浴びせた。

今迄の学徒動員の四日市の海燃では名古屋の航空機工場の夜間爆撃を伊勢湾を隔てて見るだけであつたがこの

間近に見る急降下の銃撃には度肝を抜かれた。

全く自分達がやられている様な感じでしたと耐えなければならぬのであつた。

それに敵と味方と相対したお互に武器を持った撃ち合ひならばやられたらすぐ撃ち返すということが出来るがこの場合、そして我々の覚悟は何としても逃げて輸送を達成する輸送船の教育である。

何と言つたつて逃げること位、逃げている立場位怖いことはないんだという悟りを得たわけであつた。

兵法には攻撃は最大の防御であると言ふ。これは好戦的野郎の言うことだ、と戦後の平和主義者は思っているらしい。

それに憲法問題も集团的自衛権問題も好戦的詐欺師の言うことだと思つているらしい。

どうもこの私の体験が人並み外れた処にある様な気がするのである。

それをいよいよみんなに訴える処迄来た。

八月十五日の終戦の日の出来事であつた。

この日は前日から何か重大放送があると言ふことを聞いていた。然し学校の予定では運輸省の方から船長経験の豊富な人が船が航空機の襲撃を受けたときこれを回避

する方法即ちジグザグ行進する舵の取り方を教えるに
来ると言うのでみんな自習の体勢で待っていたのであるが
とうとう来れなくてと言うのはこの終戦放送のことであ
る。来れなかったらどう思うか、こんな経緯で我々はラ
ジオの雑音も特にひどくとも終戦を信じなかった。そ
れにこのジグザグ行進の方法も信じなかった。これも戦
後長い間私の頭に残った疑問であったけれども最近にな
ってようやく戦記物を読んでいてなるほど、と感ずる処
があった、それは戦艦大和のレイテ作戦の時のことであ
るが、終戦内閣と言はれた鈴木貫太郎内閣の前に東條
から引き継いだ小磯国昭首相の就任のときのニュース
映画を見た。

「この度のレイテ作戦は大東亜戦争の天王山である」と
言って全力を上げてこれに立向うんだという大演説であ
った。

それが大惨敗であった。それでも武蔵はやられて大和
は何故逃げて来られたのか、大和武蔵として互に姉妹艦
として同じものであるのと思っていたのが疑念であった、
それに栗田艦隊としての不手際もわからないと言う。

長い間の疑問も近頃やっと溶けた思いである、それは
或戦記物語りに出ていた。

姉妹艦として建造された大和武蔵はほとんど同じ性能
を持ったものであったと言う、それが何故武蔵がやら
れて大和が逃げて来られたのかそれは武蔵が新造船で乗
組員が熟練していなくて大和は熟練の乗組員であるのが
違ったと言うことであった。あの巨艦の大和が敵機の襲
撃を避けてジグザグ行進でふり切って逃げられたんだと
言う。

終戦の日に我々商船の乗組員の卵に自信を持って教え
に来ると言うのに信を置けなかった我々であった。

戦争体験と言うのはこんなものであると言う悟りの一
端であった。

とに角戦争は終わった。もう空襲警報にビクビクしなく
てもよい、いや空襲そのものがなくなればどれだけ平和
というものが有難いものか、元来船乗りというものは平
和でありたいという種族だ。

然し旧制中学でかいつまんだ西洋史を学んで来た我々
の頭には古代ローマ帝国のローマに対抗していたカルタ
ゴが強大な海運国であったのに何故亡ぼされてしまった
のか。

この様な頭の中の記憶をかき立ててみるとそれは海運
国である為に最後迄ローマと戦うことをためらって、先

制攻撃で負けたんだという。

それでも莫大な賠償金を要求されても戦後の海運でこれを支払ったと言う。

日本は空襲ですべてを失って負けた、これは物と心のことであるが何と言っても我々の目的とする海運事業の要員になるといふ志は失くならないだろう。即ち学校は廃止には到らないだろうという気持ちであった。

そして授業は中止して毎日短艇を漕いで沖の干潟に貝捕りに行った。

それで一週間すると学校長が全校生徒を集めこの訓示であった。

「日本は戦争に負けなければ無くなるわけではない何としてもこれは日本の歴史始まって以来初めての経験であり大変不安なことであるが我々の戦前からの経験を総合するとアメリカも民主主義の国であるから日本も亡くなるわけではないだろう。

それにこの学校はみんな志願する時からわかっていた通り運輸省の直轄の学校であるから昨日運輸省から連絡が来た。

それによると生徒も不安なことだろうから一旦家に帰すことにする、学校が存続するかはまだわからないが今

鋭意検討中であるということであるからこれに従って行動してほしい」ということで、遠方から来ている者から帰ることになった。

先ず九州種子島鹿兒島と東は長野県であった。全員切符の手配を受けて最初の一陣はみんな味野駅迄見送りに行った。

私は三番目の組になった。

福井に帰る班長のI君と伊賀に帰るE君の三人での同行である、食堂で弁当も貰った、これが公費で船乗りになると言った最後の支給になったわけである。

それからの伊勢に帰る迄の鉄道の旅こそ敗戦国のみじめさをいやが上にも味わうことになった。

戦後になってから必勝の信念とか神国日本断じて勝つ本土決戦とかの言葉が如何に馬鹿らしいことであったかと言うことになったけれどもその時敗戦ときまるまでは何といつてもこれが今生きて在る我々の心の支えであったわけである。この心の支えをすっかり取外してどのように行動するかであった。

伊賀から来ていたE君が言うには大阪は丸焼けであつてお前は普通なら梅田駅で降りて環状線で近鉄の鶴橋迄行って近鉄の参宮線に乗ればそれで宇治山田迄直通で行

けるわけだけれどもそれが空襲でメチャクチャになって
いるらしいから俺といっしょに国鉄で行こうと言うから
同行することになった。

こういう時は人間誰でも仲間が欲しいものである、よ
うやく岡山駅に来て時間表のない山陽本線に乗るために
大阪行きの列車を待っていて満員でどうしても乗れない
のを四列車も見送ったときのいら立った気持、その揚句
窓から飛び乗って海軍の傷痍軍人の上等兵曹に叱られた
ときのこと、ようやく梅田駅に着いて東海道本線で京都
行き列車に乗るときは窓ガラスを打ち破って乗ったがみ
んな持つて来た手荷物で普通ならみんな座席に座って背
もたれしている高さまで大小さまざまの荷物で一パイで
あった。

この荷物の上に這い上った、すると天井に頭のつく程
である。

荷物の上にあぐらをかいて天井を手でつつ張つていな
ければ頭を打つんだ。

こんなこと国鉄始まって以来の初めての試験だろうな
あとと思った、それに動き出した列車の揺れがまたひどい。
しばらくすると鉄橋にさしかかった、E君がこれは淀川
だろうと言う。何とかして無事に川を渡ってくれと念じ

るばかりだ、それでもゆっくりと走っているからそれ以
上の揺れはない。

ようやく淀川の鉄橋を渡ったのか鉄橋特有のガーガー
という音はしなくなった、外は暗闇である、真夜中に京
都駅についた、親父に送ってもらって高松行きの夜行列
車に乗ったのは半年前である、班長のI君は福井に行く
のに別れた、これは一生の別れとなった。

駅のホームで一夜を明かす間この東海道本線の乗客乗
場で時々目を醒ますと戦場を思わせる乗客の有様を見
た。

或客車には機関車の後に貯炭車という石炭を積んだ貨
車がある、これが石炭はいつも満杯であるわけではないの
でその空いている処迄復員兵が一杯乗っているのだ
る。

更に後からやって来た機関車には一番前にある棚に一
列六人位の人間が腕をがっちり組んで乗っているのだ
あった。

ようやく夜が明けて始発の奈良線に乗った席はがら空
きであった。こんなに本線とローカル線に違いがあるの
にびっくりした。

木津駅につく迄は全くの平和な国の旅行であった。

ここで関西線に乗り伊賀上野駅でE君は降りていった。

亀山駅で参宮線に乗り換えるともう故郷に帰ったのも同然であった。

然し宇治山田駅に降り立って驚いた。駅前から少しの処だけが、外宮参拝の道だけが焼残っていただけであった。

山田の街は一面の焼野原であった。

(前編終)

